

鷹陵史学会第22回年次研究大会

公開シンポジウム

「境界のない世界 境界のある世界―前近代ヨーロッパと私たちのまなざし」開催の趣旨

三〇年戦争の結果結ばれた一六四八年のウエストファリア条約により、ヨーロッパでは主権国家体制が確立し、以後領土と国民を囲い込んだ領域国家、主権国家が世界に広がっていった。また一七八九年のフランス革命以後、国民と外国民を区別するためのパスポートが基準化され、これもしだいに世界に広がった。「王様の国」ではなく、国民みんなの上に「国家」があるという意識が生まれる。現代の領土・国民を規定しているのは、こうした歴史が前提にあるのだが、そのことはあまり意識されない。自国にいるときには気づかないが、外国旅行をしようすると、域外に出る、ということをおどかす自覚させられる。税関や入国管理局という国家機関が、私たち国民をしつかり管理しているという場面に直面することになる。パスポートは命の次に大事なものの、という旅行会社の考え方もある。国境は目に見えなくとも厳然として存在する。

しかし、こうした領土と領土外や国民と外国民などの区別が絶対的なものなのだろうか、という疑問がある。今回のシンポジウムを企画する際の一つの出発点だった。国境にとどまらず、広く「境界」という概念を再考してみよう、という発想である。「グローバル社会」と最近よく使われるが、それはもつと以前からの考え方でもある。世界はとつくにつながっていて、人々は境界を気にすることなく移動し、旅行し、恋をし、商売をし、戦争をしていた。そうした豊かな世界史像を提示することも意味がある。

海に囲まれた日本では「境界」が見えにくいですが、大陸ヨーロッパでは、橋の向こうとこちらが違う国、という風景

も見られる。スペインでは、少数民族バスクがフランス領にもいるため、両国の国境は村境並のゆるいものになった、という近年の報道もあった。「境界」の議論はヨーロッパを舞台にした方が、わかりやすい。そこでヨーロッパ史を専門にしておられる二人の碩学、川北稔教授と井上浩一教授に話題提供をして戴き、議論を試みよう、との議論が、お二人と塚本美栄子先生、山崎覚士先生、原田の間で行われ、実現した。

（文責：原田敬一）